

水をもとめて

—鳳宮池伝説—

上郡町行頭

① 石碑を見て

大皆坂を登りきったところ、鳳宮池の入口に、私達の背たけぐらいの仏様が石にきざま

れて建っています。仏様のお姿は子どものようですし、お顔は

やさしい女の子のように見えます。仏様の前にはお花が供えられ、お線香もあ

に來ているのでしよう。

石碑の左側には、願主・江戸と書かれ、四人の名前が読みとれます。右側には、明治三年七月吉日発起世話人として、人の名前が読みとれます。また仏様の前には、六十六部供と書かれています。

私達は願主という文字を見たとき、今から百年ほど前この石碑を建てた人々は、「いたい何を願ったのだろう。」と思いました。それも一人や二人ではありません。六十六部供というのですから、六十六人以上の人達の願いをこめたお経も、この石碑の中に納められてい

るのです。私達は、こんな立派な石碑を建てた人々の

願ねがいを知るしために、おじいさんやおばあさん
に聞きいてみることにしました。

②江戸時代のくらし

石碑せきひに書かいてあつた江戸時代は武士ぶしが中心ちゆうしん
の世よの中なかでした。人口じんこうの八割はちわりもいる百姓ひやくしやうたち達
は、高たかい年貢ねんぐをとられ、食たべるものも食たべら
れずままずしいくらしをしていました。

大皆坂おおかいさかの山やまのおくには、百姓ひやくしやうたち達だちが武士ぶしに
見みつからないようにかくし田たをつくり、やっ
ととのことで食たべていたそうです。

③水みずにこまっていた船坂村ふなさかむら

鳳宮池ほうぐういけのなかつた三百年ねんいじやうまえ以上前は、田たの横よこ
に小ちいさなため池いけをつくったり、井戸いどをほつた
りしていねを育そだてていました。

金内かなえの百姓ひやくしやうたち達だちも水みずにこまりはてていまし
た。安室川やすむろがわの水みずは、干かんばつつのときには金内かなえま
で流ながれてきませんでした。また、ため池いけをつ
くろうにも水みずが流ながれてくる谷たにがありません。
金内かなえの百姓ひやくしやうたち達だちは、一つ一つの田たんぼに井戸いど
をほり、水みずをくみ上げては田たへ流ながしました。

④殿様の命令とのさまめいれい

今いまから三百年ねんほど前まえ、赤穂あこうの殿様とのさまだつた
浅野内匠頭あさのたくみのかみは、自分じぶんの領土りやうどを豊ゆたかにしたいと
考かんがえました。

そこで上郡かみごおりでは、与井よいの土手どてをきざいで
千種川ちくさがわのこう水みずを防ふせいだり、赤松あかまつのたくみ
池いけ・山野里やまのさとの大池おおいけなどをつくって、米こめがたく
さん取とれるようにしました。鳳宮池ほうぐういけもその一

つだったのです。

あの鳳宮池のある所には、昔、七つの谷の水が集まる、自然の小さな池があったそうです。そこで浅野内匠頭は、堤防をつくれればいと考えました。

よし、どんな苦しい工事でもやりぬこう。

村人達は心に固く決心しました。

⑤ 池づくり集まる

五つの村々（行頭・宗末・別所原・金内・皆坂）から、池に向かって行列が続きます。

「池ができたらくらしも楽になるぞ。あわの飯もおしまいだ。白い飯をうんと食べさせてやるからな。」

男衆はもちろん、女・子どもまでがモッコ

をかつぎ、くわ・古むしろ・飯たき道具・千本を持って続きます。

池についた者から休む間もなく働きます。岩ばんをのみで切り取る者、取った石を運ぶ者、山土をけずっては運ぶ者。

「池さえできれば楽になる。」

みんな一つの心なのです。

⑥ 土ふみ

石の土台ができ、土が運ばれてくると、今度は土ふみです。赤土に石灰をまぜふみかためます。土の上に古むしろがしかれ、水がかけられると、女・子どもの出番です。男衆にまじって千本を持った女・子どもたちも力いっぱいかためています。

これらの音が一つになって山一体にひびきます。

「さあ、歌に合わせてふんだ。ここが岩のように固くならんと堤はくずれてしまうんだぞ。」

こうして一日の仕事が終わるころには、だれの足もくたくたです。それでも「つかれた。」とは言いません。池を作る望みでいっぱいなのです。

⑦ 堤防が流される

工事は、一年・二年と続けられました。なにしろ長さ42メートル・高さ14メートルもある堤です。岩ばんにそってつくっているのですが、思うように進みません。

何年もの年月がすぎ、完成まであとわずかになった年の夏、大雨がふり続きました。

「堤はだいじょうぶだろうか。」
と、男衆が集まってきました。とそのとき、

「池の堤がくずれたぞ。」

大声でさけぶ声が聞こえてきました。

「何。くずれただと。」

村人が川にかけつけてみると、いっそうましただろ水がゴォーゴォーと音をたてて流れています。

「何ということだ。あと一息だというのに。」

次の日、堤にかけつけてみると、何年もかけてつくった堤はあとかたもなく、けずり取った石や集めておいた土も、すっかり流され

ていました。

⑧ また切れた堤

「こんなことでくじけるな。もう一度やり直した。」

気をとり直した百姓達は、次の日から工事にとりかかりました。前よりも一そう固くと力を入れてふみました。子どもたちも必死になつて働きました。

ところが、三分の一ほど出来たある日のこと、空がにわかにかきくもったかと思つくと、滝のような雨がふり出しました。七つの谷からおしよせてくる水は、みるみるうちにふくれ上がり、つくりかけの堤をこわしはじめました。と、ドドドド ドドドドドドドドドドドド。

ものすごい地ひびきがしたかと思つと、堤はひ難している百姓達の目の前でくずれ落ちていきました。

⑨ 五村の名主の相談

「こつたたびたび流されるのは、神様のおいかりかもしれない。」

五つの村の名主たちは、何回となく集まつては話し合いましたが、よい方法が見つかりません。

ある日、一人の名主が、重い口を開きました。

「どうだろう。人柱をたてては。」

「おお、それはいい。人柱をたてれば、水神様もきつとわしらの気持ちを分かつて下さる

だろう。さっそく人柱に立ってくれる娘をさがそう。」

しかし、名主たちが娘のいる家を一けん回っていったけれど、どこの家も娘をかくしてしまい、人柱になろうという娘は出てきませんでした。

名主たちはこまりました。人柱をたてる以外、村人の心を固める手だてはないのです。

「わしの娘を人柱にたててくれ。」

一人の名主の、それは小さい声でしたが、外の名主にははっきりと聞こえました。

⑩ 娘の白い着物

名主には、十二才になる一人娘がいました。村一番のきりようよしで、心もやさしく、

の人に、

「しの、しの。」

と、かわいがられていました。

その夜、名主は事のしだいを家の者につげました。娘は悲しそうでしたが、父の苦しみがわかるのでしよう。一言も言いませんでした。

夜おそく、しのをとでもかわいがっていたおばあさんとおかあさんは、白い着物をぬいました。一針一針、着物をぬう手がふるえています。

明け方近く、雪のように白い着物がぬい上がりました。

⑪ 人柱をたてる

名主の娘のしのが人柱にたつぐと伝え聞いた村人たちは、手に手に数珠を持ち、池に集まりました。

村人達の念仏の声の中を、ぬい上げられたばかりのまっ白い着物を着たしのが、堤の方へと歩いていきます。

しのは、一人堤のまん中まで来ると、池に向って静かにすわり、手を合わせました。

そのときです。村人をかき分けるようにして、しのおじいさんとおばあさんがかけよりました。二人はしのを囲むようにすわると、しのに向って手を合わせました。村人の中からどよめきが起こりました。

と、しのお父である名主がひきさけんばかり

の声でさげびました。

「さあ村の衆、うめて下され。じじとばばがしのを守ってくれるそうじゃ。」

念仏の声はしだいに高まり、すすり泣く声に変わっていききました。

⑫ 七十町歩をうるおした水

不思議なことに、あれほど続いた大雨もびたりとやみ、それからの工事はどんどん進んでいきました。

「しのが守ってくれている。」と思うと、石を運ぶ手に力がこもります。ふみしめる足にも、いっそう力が入ります。

何年もかかっていた工事を二年余りでやりとげました。

こうしてでき上がった鳳宮池の水はハチノコをとおしておとし口から出ると、行頭をぬけ、宗末・別所原・金内へと流れ、七十町歩の田をうるおしました。

⑬ 苦しみを伝える

村人たちは人柱になった三人のことを忘れることはありませんでした。が、当時は武士の力が強く、三人を祭ることは許されませんでした。

では、石碑が建てられる明治三年までの二百年間、人びとはどのようなようにしてこの出来事を伝えてきたのでしょうか。

百姓達は、池を見下ろす山の上に水上様を祭りました。毎年五月十五日になると、

「田植えが無事すみますように。」といのります。そのいのりの中で、しのと二人の老人に手を合わせてきたにちがいありません。

武士の世の中が終わったとき、二百年間いのり続けてきた祖先の願いが一度にふき出し、あの石碑をつくらせたのではないのでしょうか。

⑭ 池を守る

鳳宮池の池もりをしてきたおじいさんが話してくれました。

「鳳宮池は、わしら百姓の宝じゃ。わしは池守りを五十年続けてきた。雨がたくさんふれば、水を止めにみのを着てニキロの山道を登っていった。少しの水もむだに流しはせなん

だ。田に水がいるときは、つめ（ハチノコ）をぬきに登った。表面のぬくい水から流すんじゃない。稲はぬくい水が好きじゃからのう。そうそう、毎年五つの村が集まって、池の祭りをした。

「ハチノコ」って何だろうと思ってたずねると、松の大木でつくった水を通す穴でした。

わたしたち鳳宮池調べに着いて来て下さったおばさんは、

「みんなが今登っている道は、毎年村の者が出て下草かりや枝はらいをするんですよ。それから、今は池もりの人も皆坂まで自動車で行き、ハンドルをまわして水を流すので楽になっていくけど、底の水が出てくるので足が

つけられないほど冷たくて、稲の育ちが悪いんですよ。」

と、教えて下さいました。

三百年間ビクともしないこの堤の上に立っていると、美しい池の水面に、わたしたちの祖先の姿がうかんでくるような気がしました。

そして今も、この水はわたしたちの生活を豊かにしてくれているのです。



鳳宮池（赤穂郡上郡町八保）